

厳しい規制 対策進展

大淀川水質に改善の兆し

生活排水の適正処理鍵

2面からの続き

「川の中に自転車や冷蔵庫が投げ捨てられ、まるでゴミ捨て場。家庭から廃油が垂れ流され、臭くて誰も近づかない。地元の川がこれでもいいのかと暗い気持ちになった」

都城市花線町の住宅地を流れ、大淀川支流の年見川に注ぐ幅約5分の柳河原川。近くに住む河川愛護団体・都城大淀川サミット会長の泰下信芳さん(84)は、1990年前後の汚濁状況を振り返る。年に2回、住民とゴム長を着込んで川に入り、清掃を約20年間続けた結果、現在はコイやフナ姿も見掛けるようになった。泰下さんは「身近な支流の汚濁を解消しないと大淀川本流の水質は改善しない。20年、30年の取り組みになり、5年、10年でようやく成果が見え始める」と話す。

ここ数十年で、水質汚濁防止法より厳しい基準を課す県条例や家畜排せつ物法が施行され、畜産農家や排水量の多

い事業所の污水対策は進展した。現在の大淀川浄化の課題は、生活排水と小規模事業所による排水対策に行き着く。

民間団体が清掃や啓発に努める傍ら、市町村は公共下水道や農業集落排水施設、合併処理浄化槽などハード面の整備に力を入れる。県環境管理課によると、生活排水を適正処理している人の割合を示す生活排水処理率(2012年度)は、県全体で73・1%。県内3市では宮崎市が88・1%、延岡市が83・2%と高い半面、都城市は63・4%で県平均を下回る。

生物化学的酸素要求量(BOD) 微生物が水中の有機物を栄養源として増殖・呼吸するときに消費する酸素量。河川の水質汚濁を示す代表的な指標で、数値が高いほど汚れて

メモ

いることを示す。水産用魚類の生息環境としては、ヤマメやイワナなどは1リットルあたり2ミリ以下、サケやマス、アユ3ミリ以下、汚濁に強いコイやフナ類は5ミリ以下が適当といわれる。

上流域には、し尿のみを処理する単独浄化槽も多く残る。県のもとめでは、県内の浄化槽設置数(同)は約14万6千基で、このうち生活排水全般を適正処理できる合併槽が約6万6千基、単独槽は約7万9千基に上り、全体の約54%を占める。大淀川上流域では、都城市と三股町合わせて約2万4千基が点在している。都城市も懸命に努力を続けている。1960年代から都市が公共下水道整備に投じた総額は約83・7億円。現在も毎年約3億円を投じて約5・2キロの下水道管を整備中だ。しかし、「敷設後も高齢

者を中心に経済的理由で下水道に接続しない世帯も相当ある(市環境政策課)のが実情という。

自治体間を横断し、流域全体で連携する取り組みもある。2004年には、国交省が旗振り役となり、上流域にある本県と鹿児島県の2市2町を中心として水環境改善緊急行動計画「清流ルネッサンスII」を作成した。国や県、市町村が一体となり、水質改善の目標値を設定し、施策の実施と追跡調査、評価と見直しを繰り返すことで河川浄化に努めている。

ただ、当初予定した10年度の目標達成はできなかったため、13年6月に新行動計画を作成し、15年度まで取り組みを継続している。計画事務局の国土交通省宮崎河川国道事務所調査第一課の東彦課長は「長期的にみると水質は改善しているが、まだ道半ばの状態。汚濁負荷を軽減するには一層の施策推進が必要」と見据える。

NPO法人大淀川流域ネットワークの杉尾哲代表理事(70)は、「大淀川のBODは改善しているが、窒素やリン、ふん便性大腸菌の数値は依然として高く、清流と呼ぶのは難しい。幼少時に大淀川で泳いだ体験を持てるような段階になるまで、行政などの関係機関だけでなく、住民を巻き込んだ活動に広げなければならぬ」と訴えている。

(報道部・佐藤暢彦)